生涯学習・社会教育学研究　第21号　1997年

マイルズ・ホートンの成人教育理念の形成過程

——ハイランダー・フォークスクールの設立とグルントヴィのフォルケホイスコーレ構想——

藤　村　好　美*

A Study on Myles Horton's Philosophy of Adult Education: Grundtvig's Influences on the Ideas of the Highlander Folk School

Yoshimi FUJIMURA

Myles Horton pursued a truly democratic society through the practice at the Highlander Folk School. In search for a better way of educating people, Horton came across Bishop Grundtvig's ideas of Folkehojskole and were greatly influenced by him. Horton himself says in his paper, "...it was not his educational ideas, but Bishop Grundtvig himself that attracted me."*

In this paper, I study Grundtvig's ideas of Folkehojskole and see how they influenced Horton's ideas of folk school, so that I can reconfirm the modern meaning of Grundtvig's philosophy. This is one of a series of my work tracing the thinkers who influenced Horton's philosophy of adult education.

First, I roughly trace some thinkers who had influence on Horton in accordance with his life history. Secondly, I review Grundtvig's ideas of Folkehojskole together with their historical background in Denmark. Thirdly, I study what Grundtvig's ideas meant to Horton and consider why Horton was disappointed with the folk highschools after Grundtvig's days. Finally, I study the modern meaning and the universality of the ideas of Grundtvig and Horton in relation to the popular education in Latin America.

*Myles Horton, "Grundtvig's Influences on Highlander Research and Education Center," *An Approach to Education Presented Through a Collection of Writings*, ed. Highlander Research and Education Center (Tennessee: Highlander Research and Education Center, 1989) 89.

目　次

はじめに
Ⅰ　ホートンの思想形成への影響
　A　神学生時代
　B　シカゴ大学時代
　C　デンマークへの旅
　D　帰国後ハイランダー・フォークスクール設立まで
Ⅱ　グルントヴィのフォルケホイスコーレ構想
　A　グルントヴィの人物像
　B　グルントヴィの時代のデンマークの状況
　C　グルントヴィの教育理念とフォルケホイスコーレ構想
Ⅲ　フォルケホイスコーレ構想とホートン
　A　グルントヴィがホートンに与えたインスピレー

・大学院博士課程３年

ション

B　ホートンがフォルケホイスコーレ構想から得たヒント

C　グルントヴィ後のフォルケホイスコーレ運動に対するホートンの評価

終わりに

——グルントヴィの思想の現代的意義とホートンの成人教育理念——

はじめに

”私はグルントヴィ主教の思想はもとより，彼という人物そのものに非常に引き付けられた。私は彼が預言的な洞察力を持った革命家であり，貧しい者や言葉を持たない者を力づけ励ます存在であると感じた。彼が27歳の時に経験した失望観は，私が当時合衆国で経験していた失望観とまさに重なる部分があった。”[1)]

ホートンは後に，デンマークの“フォルケホイスコーレの父”[2)] グルントヴィ（Grundtvig）について，このように述べている。アメリカ南部アパラチアの民衆のための学校，ハイランダー・フォークスクール[3)] の設立に中心的な役割をになったマイルズ・F・ホートン（Myles F. Horton）がグルントヴィのフォルケホイスコーレ構想に巡り会ったのは，彼がアパラチアの抑圧された民衆にとっての学びのあり方を模索し悶々としていた青年時代のことであった。

ホートンは，既存の学校やカレッジの教育方法では，アメリカの中の第三世界とさえいわれる南部の貧しく虐げられた人々の学習要求に答えることは出来ないと感じ，全く違った形の成人の学習の場のあり方を追求していたのである。人々の日々の生活から発生した様々な問題を解決し，社会をよりよいものに変えていくための学びとは何かという命題を常に念頭に置いて，彼は多くの書を読み，多くの師に出会い，思索を深めていった。それらの多くの思想が，ホートンの成人教育理念の形成に影響を及ぼし，彼はそれらの思想を自らの血と肉へとそしゃくしていったのである。その中でもグルントヴィのフォルケホイスコーレ構想は，民衆のための学校のあり方や教育方法に関するインスピレーションをホートンに与えたのである。

筆者は現在，ハイランダー・フォークスクールを中心としたアメリカにおけるpopular educationの系譜とその理念形成に中心的役割を担った成人教育運動史上の巨人マイルズ・ホートンの成人教育理念を分析する作業を行っている。学校形態を取る成人教育が主流を成し，その目的も職業能力の習得や資格の取得にあるアメリカにおいて，異色ともいえる民衆の対話を通した学びを追求したハイランダー・フォークスクールの理念が，異端視されながらもなぜ今日まで連綿と続き，ついには世界的連帯を模索するまでに至ったのか，その力の背景を追求するために，ホートンの教育理念の分析は必須の作業であるからである。本稿はその一連の作業の一部を成すものであるが，本稿においては，前世紀のグルントヴィのフォルケホイスコーレ構想と今世紀のホートンの民衆のための学校観が，いかなるところで響きあったのかを追求するために，グルントヴィの人物像と彼のフォルケホイスコーレ構想について考察し，19世紀の教育思想家であるグルントヴィのもつ現代的意義を探ることを目的とする。

グルントヴィの思想やデンマークにおけるフォルケホイスコーレ運動に関しては，欧米諸国はもとより，日本においても，古くから関心を持たれ研究の対象となってきた。今世紀初頭，内村鑑三はデンマークを理想の国，あるべき日本のあり方として紹介した。[4)]その後大正時代から昭和の初めにかけて，理想の農業国デンマークブームが起きる。このブームの中，東大の農科大学に学んだ農本主義者たちは，フォルケホイスコーレを“国民高等学校”と訳し，農村振興の模範例として紹介し，それを受け国内各地に日本版国民高等学校が建設された。[5)]しかし，戦前のフォルケホイスコーレ理解は国粋主義的誤解ともいえるもので，日本版国民高等学校は日本独特の皇国教育の場へと姿を変えてしまったのである。戦後は社会教育研究において，佐々木正治が一貫してデンマークの社会教育及びグルントヴィの思想について追求し，彼の研究によりグルントヴィを国粋主義者とする誤解は一応解消された。戦後日本の民主化の動向及び社会教育の発展と，民主国家先進国デンマーク及びその成人教育に関する一連の研究は呼応していたといえよう。[6)]しかし時代的制約も原因したのか，フォルケホイスコーレを“国民大学”と訳出したため，フォルケホイスコーレは民衆教育の場というよりも国民教育の場としての色彩が濃く紹介されてしまい，この点ではホートンのグルントヴィ理解とは異なる点もあることは否めない。

そこで本稿においては，グルントヴィの思想を単独で検討するのではなく，community-based-education, popular educationの実践者マイルズ・ホートンの眼を通したグルントヴィ像を追求することで，グルントヴィの思想の持つ現代性，普遍性を改めて問いなおしていきたい。

まず第Ⅰ章においては，グルントヴィのフォルケホイ

スコーレ構想とホートンの思想の関係を検討するための準備作業として，ホートンに影響を与えた思想・哲学を時系列的に整理する。次いで第Ⅱ章において，グルントヴィのフォルケホイスコーレ構想を，19世紀デンマークの政治的,教育的背景を考慮に入れながら明らかにする。さらに第Ⅲ章においては，フォルケホイスコーレ構想がホートンにとってどのような意味を持つものであったかを説明すると共に，なぜホートンはその後のフォルケホイスコーレ運動に失望したのかを，考察する。そして最後に，グルントヴィの思想とそれを発展的に継承したホートンの教育理念の持つ現代的意義と普遍性について，南アメリカを中心に展開している民衆教育との関連の中で考察を加え，まとめとしたい。

Ⅰ　ホートンの思想形成への影響

マイルズ・F・ホートン（1905-1991）は，1924年，19歳の時，テネシー州のカンバーランド大学の神学生となったが，この頃彼は自ら地域の成人を対象とした集会を数回持ち，地域の民衆の学習意欲を肌で感じ，成人教育の重要性を痛感するに至っていた。[7]その後彼は，アパラチアの成人にとって真の学びとは何か，地域住民のための成人教育にぴったり合った教育方法は何かについて常に模索し，数多くの思想に出会い，それを通して自らの教育理念を形成していったのである。

表１は，ホートンの人生の歩みと各時期に彼に影響を与えた数々の思想を簡単にまとめたものであるが，グルントヴィのフォルケホイスコーレ構想の検討の前段階の作業として，まずこの枠組みにそって以下彼に対する思想的，哲学的影響を概観していこう。

表１　Myles Horton の歩みとその思想形成

— Highlandre Folk Schoolの設立まで —

年	Myles Horton の人生の歩み	Horton の関心，及び Horton の思想への影響
1905	Myles F. Horton，テネシー州サバナに生まれる。父Perry Horton，母Elsie Horton。その祖先はスコットランド・アイルランド系。	両親は長老派教会に属す。（キリスト教的博愛·社会奉仕の精神）
1924	テネシー州レバノンのカンバーランド大学の神学生となる。(英文学専攻)	
1927	カンバーランド学生ＹＭＣＡの会長となる。	労働者の権利の実現に強い関心。
1927	テネシー州オゾンの長老派教会の夏期聖書学校で，生徒の親を対象に集会を持つ。	大人達が学習に対する強い意志を持つことを知る。
1928	大学を卒業。ＹＭＣＡの学生書記として，成人教育プログラムの設立に奔走するが，賛同を得られない。	さらに勉強する必要性を痛感。
1929	ニューヨーク市のユニオン神学大学に入学する。	最初の師Reinhold Niebuhr (Christian Socialist)。John Deweyの著作からの影響。Eduard C. Lindemanの著作との出会い。
1930	神学校を中断し，社会学を学ぶために，シカゴ大学大学院へ行き，Robert E. Park に師事する。	Robert E. Parkの社会学理論の影響。
1930～1931	シカゴのハル・ハウスを頻繁に訪問。	Jane Addams の実践からの影響。
1931	デンマークのフォルケホウスコーレ視察の旅に出る。	Grundtvig の構想に共鳴。
1932	帰国後。成人のための学校建設に着手。	
1932	Highlander Folk School 開校（11月１日）。	

A　神学生時代（1924～1929年）

前述の通り，ホートンは1924年テネシー州のカンバーランド大学の神学生となり，この時期に成人教育に対する地域の民衆の熱意を肌で経験した。すなわち彼は，テネシー州オゾンの長老派教会の夏期聖書学校で生徒の親を対象に集会を持ち，南部の成人達が労働・健康・組合・地域の経済に関する学習に対する強い意志を持っていることを知り，彼は自らの成人教育に対する使命を確認したのであり，その経験を彼は後に“私の生涯で最も大きな発見”[8]と表現している。まさにこの発見こそが成人教育実践者であり思想家である彼の方向性を決定した経験だったのである。なおこの頃彼はウィリアム・ジェイムズ（William James）やジョン・デューイ（John Dewey）の著作を多く読み，プラグマティズム哲学の思想を学びその多くを吸収した。

1928年にカンバーランド大学を卒業したホートンは，一時YMCAの学生書記として，成人教育プログラムの設立に奔走したが，周囲の賛同を得られず，彼の熱意は空回りに終わった。彼は成人教育について自らがもっと学ぶ必要があることを痛感し，翌1929年にはニューヨーク市のユニオン神学大学（Union Theological Seminary）に入学したのである。ここで彼は最初の師ライホールド・ニーバー（Reinhold Niebuhr）に出会ったが，ニーバーはそのキリスト教社会主義思想を理念と行動によってホートンに伝え，ホートンは，教育とは新しい社会秩序を生むための道具であるという考えを持つに至った。すなわちこの時期は，ホートンの教育理念の基礎が形作られた時期であり，彼の教育思想の底流にはニーバーの思想が息づいているのである。同時にこの頃ホートンは，デューイの著作を再び熱心に読み，教育と社会という命題について真剣に思索をめぐらしていた。

また同時にホートンは，エドュアード・リンデマン（Eduard C. Lindeman）の成人教育思想，すなわち成人教育は社会変革のために役立なければならないという，当時のアメリカでは斬新な思想を知り，成人教育こそが南部の抑圧された人々の問題を解決する方法であると自覚するに至っていた。

B　シカゴ大学時代（1930～1931年）

ユニオン神学大学に在学中，ホートンの学問的関心は次第に神学から社会学へと移行していった。彼は学位や単位の取得とは無関係に，純粋に学問上の関心からシカゴ大学社会学大学院のパーク（Robert E. Park）のもとに向い，彼の講座に参加するようになる。ここで彼はパークの参与観察の調査・研究方法について学ぶと共に，パークの“社会変革のための危機，闘争，集合行動の理論”を理解するようになった。

シカゴ時代にホートンは大学から外へ出て，様々な教育実践を目の当たりにし，刺激を受けている。例えばハル・ハウスをたびたび訪問し，ジェーン・アダムス（Jane Addams）やアリス・ハミルトン（Alice Hamilton）と討論の機会を持ったが，彼女らのセツルメントの考え方は彼の目指す学校のあり方に対して大きな示唆を与えたのである。

また，デンマークのフォルケホイスコーレについて知ったのもこのシカゴ時代である。ホートンは，デンマーク出身の牧師ミューラー（Aage Møller）と知り会ったことをきっかけとして，この頃デンマーク系移民のコミュニティに通うようになっていた。そこで彼は，デンマークの文化，言語，フォルケホイスコーレについて学ぶ機会を得，フォルケホイスコーレに強い関心を抱くようになったのである。

C　デンマークへの旅（1931～1932）

ホートンはフォルケホイスコーレに強い関心を抱き，その構想の主グルントヴィに関するあらゆる本に眼を通していった。アパラチアの地にフォルケホイスコーレを移植することが出来たら，と考えていたのである。そして彼は，ついに自分の眼でデンマークのフォルケホイスコーレを視察するべくデンマークへ旅だった。彼はデンマークで出来る限りのフォルケホイスコーレを実際に訪問し，教師や生徒に話を聞いたりもした。しかし彼の眼にはそれらのフォルケホイスコーレが，グルントヴィの構想にあるものとは違って，色あせたものとしか映らなかった。創設当初の情熱や道徳的理念が薄らいで来ているように感じたからである。そして，彼はデンマーク滞在中，眼の前にあるフォルケホイスコーレよりもグルントヴィの構想の中にあるフォルケホイスコーレに，自らの作るべき学校についてのヒントを見出し，行動をおこすべく帰国の途についたのである。

なお，ホートンは1931年のクリスマスの晩，コペンハーゲンにおいて，帰国の決心について次のように日記に記している。

“眠れない。しかし私は夢は持っている。今私がするべきことは帰ること……簡単な場所を得ること……そしてそこに移り住むこと……私はそこにいる……そこにするべきことがある……それ（学校）を始めて自ら発展させよう……それは自らその形を作っていくだろう。学校を作ろうと一生躍起になっても出来るものではない。なぜなら答えは人々の生活から生まれて来るものなのだから。”[9]

D　帰国後，Highlander Folk School設立まで(1932)

前述のような決心を胸に帰国したホートンは，民衆のための学校建設に奔走することとなる。財政的な後押しは，旧師のニーバーが中心となった。学校の運営に関しては，ユニオン神学大学時代の友人ジョン・B・トンプソン（John B. Thompson）とジェームズ・A・ダムブローフスキ（James A. Dombrowski）が加わった。次に学校の建設地を求めるうちに，彼はダン・ウェスト（Don West）に巡り会った。ウェストはホートンと同様，デンマークの教育に強い関心を持っていたが，彼にはすでに学校の建設地の候補となる土地についてのめどがあった。ホートンとウェストは何日も討論を重ねた末，ホートンは資金を，ウェストは土地を提供することで，両者は協力して学校を設立することを同意するに至った。

こうして1932年11月1日，ハイランダー・フォークスクールがテネシー州マントイーグルに開校したのである。

Ⅱ　グルントヴィのフォルケホイスコーレ構想

前章では，ホートンの教育理念形成に影響を与えたとみられる人物・思想についてアウトラインを描いたが，本章では，寄宿制をとるハイランダー・フォークスクールに形式上は最も近いと見られる，デンマークのフォルケホイスコーレの構想の主グルントヴィと彼の思想に光をあてていこう。

A　グルントヴィの人物像

デンマーク・フォルケホイスコーレ協会前会長のオヴェ・コースゴール（Ove Korsgaard）によれば，“成人教育の父”[10]ニコライ・フレデリク・セヴェリン・グルントヴィ（Nikolaj Frederik Severin Grundtvig）（1783-1872）は，デンマーク人にとってはアンデルセンやキェルケゴールよりも重要な人物である。彼はグルントヴィのことを，“近代デンマークで最大に重要な人物である。”とまで断言している。[11]デンマークにおいてグルントヴィの影響した分野は，哲学，文献学，神学，歴史，政治理論，教育と多岐にわたっている。また，754のデンマークの賛美歌のうち271の歌は彼によって書かれたものである。[12]いわばグルントヴィは，“近代デンマーク精神の父”[13]ともいえる存在である。

幼・少年時代

グルントヴィは1783年9月18日に，デンマーク，シェラン島東南部のウドビーにルター派教会の牧師の子として生まれ，豊かな自然の中，母や教会を訪れる住民達が土地の言葉で語る昔話を聞きながら情操豊かに少年期を過ごした。地元の小学校に通った後，1793年，10歳の時にユランのテュアゴズに送られ，6年間そこの牧師のもとでラテン語などを習った。彼はこの時，牧師の豊富な蔵書の中から，ギリシャ・ローマの詩や歴史の古典などを興味にまかせて読みふけったという。

その後，彼はオーフスのラテン語学校へと進学した。これは当時高等教育を受ける者には必修のものであったが，ここでの無味乾燥な詰め込み教育と権威主義的な教師に代表される息の詰まるような学校生活は，グルントヴィにとって悲惨のひとことに尽きた。彼は後年ラテン語学校を“死の学校”と呼び，本による教育を主体とした“死の学校”は無益な機関であるとさえ言いきっている。[14]この時の経験は，彼が後に“生のための学校”フォルケホイスコーレの構想を生み出すばねとなったに違いない。

青年時代

1800年，グルントヴィはコペンハーゲン大学の学生となる。そこで彼は，ノルウェー人教師ヘンリク・ステフェンスの講義を集中して学び，この時学んだドイツ啓蒙思潮の思想家ヘルダーの風土論，言語論，歴史哲学は後のグルントヴィの思想形成に大きな影響力を持っていた。

1803年，彼は神学試験に合格するが，牧師にはならず，北欧神話とアイスランド伝説の勉強に没頭するようになっていった。この頃から彼は，研究活動とともに詩人として文筆活動も行うようになっていたが，1811年，高齢の父を福牧師として手伝うため，故郷のウドビーに呼び戻される。しかし彼は，デンマークの国教会であるルター派の教えが，現世の意味は来世での救済にあると考え，この世にある意義，人間的な感情・感性の意味，キリスト教の真理と人間性との関係を教えてくれないことに疑問をもち，これより数十年間悩み続ける。[15]彼は悩みながらも，牧師として人々に説教する中で，真理は聖書にあるのではなく，教会に集まる会衆の中にあると考えるようになる。キリストの生きた言葉は，教会に集まる貧しき信徒たちの間にこそよみがえるのだと考えたのである。

彼のこうした思想はデンマーク国教会のひんしゅくを買い，グルントヴィはコペンハーゲンの知識人たちからは孤立したが，反面フュン島を中心に農民や地方の牧師はこのグルントヴィの思想に鼓舞され，教会の改革などの社会改革運動を起こし，彼の思想は民衆の圧倒的な支持を得た。彼はいわばラディカルな人民主義者であり，社会改革のオピニオン・リーダーとなったのである。

イギリスへの旅

1828年，グルントヴィは国王フレデリク6世に進講し，イギリスへの研究の旅を許される。以後，彼は三度にわたりイギリスへと向かったが，そこで彼が見たものは，産業革命と資本主義の進展，プロレタリアの登場，市民革命の結果としての自由主義の勃興であった。特に彼がケンブリッジ大学トリニティ・カレッジで，寄宿生活の中，教師と学生がともに自由に語り合う姿を見たことは，彼のフォルケホイスコーレ構想に大きな影響を与えたのである。

B　グルントヴィの時代のデンマークの状況

グルントヴィの既成の権威との戦いは，デンマークの当時の状況なくしては語れない。そこで本節では，19世紀前半のデンマークの歴史的背景とその教育について概観する。

19世紀前半のデンマークの政治

グルントヴィが青年期，成人期を過ごした19世紀前半のデンマークは絶対王政から立憲君主制の過渡期にあった。大陸のフランスでは，18世紀後半のフランス革命により絶対王政は終わりを遂げたが，グルントヴィは，デンマークにおいては絶対主義から民主主義への移行は，革命によらないで教育によって漸進的に改革される必要があると痛感していた。[16]つまり彼は変化の激しい時代状況の中で，民衆の教育的覚醒の必要を感じていたのである。

デンマークにおける絶対王政は1849年に終わりを告げるが，その際新しい憲法を作ったのは若い大学人たちであり，新憲法は当時のヨーロッパの中で最も民主的な憲法のひとつであった。[17]

18世紀のデンマークは中立政策をとり経済的に繁栄していたが，19世紀になるとデンマークの外交は難しい局面に入っていた。1864年，デンマークは，ユラン半島南部のスレスヴィとホルスタインの帰属をめぐり，プロシアとオーストリアとの間に戦闘を開始したが，結局デンマークはこの戦いに破れデンマーク領の北スレスヴィを失ってしまう。[18]この敗北により，それまでの指導者層は衰退し，新しい階級が台頭した。それまで何の役割もになっていなかった農民層の影響力が大きくなったのである。グルントヴィはこの新階級―農民層に大きな影響を与え，それまで地主階級や都市部の中産階級の蔭で抑圧されていた農民たちは，自分達の可能性に強い自信をもつようになったのである。戦争に破れ惨めにうちひしがれ，フランスの啓蒙思想やドイツ文化の立場に立ってデンマークの文化や言語を卑下する都市部の知識階級とは対象的に，デンマークの農村地区には，デンマークの地域の民衆本来の自信を取り戻すことによって新たなより偉大なデンマークを創造しようとする力がみなぎっていた。グルントヴィはデンマークの地域文化の尊さを数多くの詩で表し，民衆にデンマーク文化に対する自信を与えたのである。フォルケホイスコーレ運動は，このような農村部を中心に展開されていった。

19世紀前半のデンマークの教育

ヨーロッパにおける教育・思想の大きな潮流の中で19世紀を位置づければ，それは18世紀の啓蒙の時代から19世紀のロマン主義の時代への移行と言うことが出来よう。なお啓蒙の時代の民衆教育とロマン主義の時代の民衆教育について，F．Poggelerは，前者はあらゆるグループの人々に分かりやすく科学や知識を広めることであるのに対し，後者は古い慣習やフォークソング，伝説，おとぎ話，ことわざなどに対する興味を民衆の中に生き返らることであり，後者においては人々の倫理的，宗教的信念が主題となると述べている。[19]換言すれば，この違いは知識注入型の教育と，思考・対話型の教育の違いであると言えよう。19世紀のデンマークの教育も，啓蒙主義からロマン主義へという流れの中にあり，グルントヴィはまさにロマン主義的教育思想家であったと言うことが出来る。[20]

ところで19世紀デンマークの公教育制度に眼を転ずると，デンマークは義務教育制を最初に実施した国の一つであり，1814年の画期的な義務庶民学校令には義務教育や成人教育の必要性が明示されている。同令17条の継続教育実践の義務規定をうけ，1820年代には都市にも農村にも夜学校が設立され，民衆大学設立の基盤を形成していった。また，1830年代には，義務教育も充実し，著名な統計学者A.F．ベアグゼによれば，”“この国では法定の就学年齢に達した全ての児童が就学している。これは，南ヨーロッパは言うに及ばず，フランス，イギリスまでも羨望の眼で眺めなければならない成果である。”[21]と述べている。

このように，デンマークでは1830～1840年代には，公教育の組織的形式的制度が完成されており，このような教育の普及は，民衆のより高い教育への要求を生んだ。増大した民衆のより実利的で，より高い教育への要求は，既存の教育制度のほとんど抗しきれないものになっていたが，佐々木正治の言葉を借りれば，”この問題をグルントヴィは教育年限の延長や中等教育の改造等によってではなく，まったく新しい制度，すなわち国民大学によって解決しようと企図したのである。”[22]

C　グルントヴィの教育理念とフォルケホイスコーレ構想

フォルケホイスコーレ構想

前述のように，グルントヴィは大陸においてフランスが革命によって絶対主義から民主主義へ大転換したのに対し，デンマークにおいては革命という手段ではなく教育によってゆるやかな社会変革が必要であるとの意見を持っていた。彼は，教育による民衆の社会的覚醒こそ社会変革の力であると信じていた。

彼は学校を，聖職者養成，学者養成，市民養成の三つの種類に分け，デンマークには聖職者養成と学者養成のための学校は十分にあるが，社会を支える市民の学校が無いと主張した。彼のフォルケフォイスコーレ構想は，このような問題意識から出発したのである。このとき彼の意識の深層には，自らの少年時代のオーフスのラテン語学校における悲惨な体験がつねに鮮明に存在していた。彼は，フォルケホイスコーレにおいてはラテン語を廃し，そこには地域の言葉すなわちデンマーク語を語る者が自由に集まり，本を通してではなく，学習者の対話による相互作用によって，ゆるやかな自己認識に至るような学習活動が営まれることを理想として描いていた。このような理想を出発点とした彼のフォルケホイスコーレ構想をまとめると以下のようになる。

①対象

グルントヴィは上述の通り学校をその目的によって，聖職者養成，学者養成，市民養成の三つに分け，フォルケホイスコーレは市民養成のための学校であるとしている。従ってその対象は，聖職者や学者を目指す選ばれた一部上層階級の青年ではなく，初等教育を終えて社会生活を営んでいる勤労青年が主であった。しかし，彼は将来官僚になるエリート層の青年をその教育対象からはずしていたわけではない。むしろ未来の官僚と農村青年，一般市民が共に学ぶ相互作用こそ重要であると，彼は考えていた。[23]

②目的

フォルケホイスコーレの目的は，一言で言えば民衆に対する生活のための啓蒙教育，すなわち“人間的啓蒙”である。ここで注意しなければならないのは，グルントヴィの言う“人間的啓蒙”は，思弁的な思考方法を特徴とするドイツ風の啓蒙とも，合理主義を基調とするイタリア的啓蒙とも，皮相的なフランス的啓蒙とも異なるという点である。事実彼はこれらの啓蒙に対しては批判的であった。[24]換言すればグルントヴィは，フォルケホイスコーレを生きた言葉を語る“生のための学校”として構想していたのである。この目的のために，彼は次のような方法を提唱している。

③方法

・生きた言葉（det levende ord）による教育

グルントヴィは文字，本を通して知識を伝授する学校教育を空疎なものであるとし，次のように語っている。

“われわれだけでなく，あらゆる国民は，死の学校を知っている。というのは，どこの学校でも大なり小なり，文字で始まり，本の知識で終わるからである。それが人が「学校」という名で呼んできたものだし，今もそう呼ばれるもののすべてである。……あらゆる文字は死んでいる。あらゆる本の知識も死んでいる。……”[25]

このような暗記学習，反復練習中心の“死の学校”に対し，日常の生きた言葉で語り合う教育方法を彼は“生きた学校”に不可欠のものであるとしている。彼は生きた言葉の意義を次のように説明している。

“人の胸中には，ある生命が眠っていて，それが，一度言葉となって発露すると，よほど強く耳をふさいでいないとどうしても心をひきつけられてしまう。……そして，この翼をもった言葉，それは，無象界に存在する生命力を，全くリアルなものとして，感得させ，実際に，目に見えるものよりも，はるかに高く，しかも，力強い現実として感得させる。”[26]

・対話

この生きた言葉による教育は，必然的に他者とのコミュニケーションを意味する。グルントヴィは，異なる他者との生きた言葉によるコミュニケーションを“相互作用”と呼び，重視している。すなわち自由な対話こそが，フォルケホイスコーレによる教育方法なのである。この対話を実現する学校のモデルは，彼が青年の時オックスフォードで見た，教師と学生が寝食を共にし，生活の中で学ぶカレッジ形式に他ならなかった。

実際デンマークのフォルケホイスコーレは，現在でも原則として全寮制をとっており，そこでは校長が学校生活における親のような存在を担っている。

・歴史的・詩的（historico-poetic）

グルントヴィは生活・経験を重視し，生活から出発し生活の開発を目指す実践科学が望ましい科学であるとし，特に人間の偉大な経験の積み重ねである歴史科学を最も望ましいものであるとした。さらに彼は，民族科学の重要性も説き，それぞれの民族性を最も力強く表している民族科学である文学は，民衆教育に大きな意味をもっているとしている。彼は，この二つ，すなわち歴史

と文学が，フォルケホイスコーレにおける教育方法の根本にあるとし，フォルケホイスコーレは“歴史的・詩的”であらねばならないとした。[27]

・試験の廃止と自己啓発（oplysning）

グルントヴィは，学校のシステムは試験に基づくのではなく，絶えざるオピュルスニング（自己啓発）に基づくものでなければならないと述べている。フォルケホイスコーレは資格，試験，単位，職業訓練とは無縁の普通教育の場でなければならない。[28]

Ⅲ　フォルケホイスコーレ構想とホートン

ホートンがデンマークのフォルケホイスコーレ運動に強い関心を抱き30歳の時，1931年から1932年にかけて，デンマークに渡り，多くのフォルケホイスコーレを訪問し，同時にそこでグルントヴィのフォルケホイスコーレ構想について思いをめぐらしたことは，第Ⅰ章で述べた通りであるが，本章では，ホートン自らによる講演をもとに，彼のグルントヴィ観，彼がフォルケホイスコーレ構想から得たヒントは何か，そしてさらにホートンのグルントヴィ後のフォルケホイスコーレに対する評価について，整理していきたい。

A　グルントヴィがホートンに与えたインスピレーション

ホートンはグルントヴィのフォルケホイスコーレ構想について多くの文献を読むうちに，グルントヴィという人物そのものに強くひかれていった。生命を失った学校に代わるべく“生の学校”を提唱したグルントヴィは，これから作る民衆のための学校のあり方を模索していたホートンにとって，救世主のように思えたに違いない。“私は，彼が他者を変え，また同時に他者から学ぶその能力を尊敬した。”[29]と，ホートンは述べている。

ホートンは，グルントヴィが多くの希望や喜びの詩や歌を書いたことに感銘を受け，それがデンマークの民衆に自信を与え，民主的な社会を形成するのに寄与したことに，強いインスピレーションを受けている。ハイランダー・フォークスクールにおいても様々な機会に歌が歌われたことは有名であるが，ホートンが何らかのヒントをグルントヴィから得たことは想像にかたくない。

また，彼は特に，グルントヴィの“生きた言葉”に強い関心をもち，次のように述べている。

“私は生きた言葉とグルントヴィの教育理念が，最初のフォルケホイスコーレの創設者の彼の中でどのように形成され，変容していったのかが知りたかった。フォルケホイスコーレの設立者はどの人も，forkyndelseという霊的に鼓舞された目的—それは生きた言葉を通して伝えられるものだが—に自らを捧げているのだと言うことを知った。”[30]

“私は，生きた言葉とは学校生活で起こること全て，つまり講義，共同学習，自らの先祖の探求などを含む，人と人との相互作用のプロセスであると理解するようになった。”[31]

そして，彼は生きた言葉を媒介とした教育プロセスは，教師と学生が共同生活をし，試験から自由な環境になければ不可能であろうという結論に達する。これが，彼がハイランダー・フォークスクールを寄宿制の学校とした要因となっていることは容易に想像できよう。

B　ホートンがフォルケホイスコーレ構想から得たヒント

ホートンは，フォルケホイスコーレ構想から得たヒントとして，次のようなことを列挙している。

“学生と教師が共に生活すること
共同学習
グループで歌を歌うこと
州の法律からの自由
非職業教育
試験からの自由
ノン・フォーマルな状況におけう社会的相互作用
大きな動機づけとなるような目的
何に賛成し，何に反対するかをはっきりとさせること”[32]

しかしこれらはあくまでヒントであって，ホートンはグルントヴィのフォルケホイスコーレは模倣するものではないし，また模倣したわけでないと，はっきりと述べている。彼は自らの意見を裏付けるように，モーテンセン（Enok Mortensen）の次のような指摘を引用している。

“マイルズ・ホートンはデンマークのフォークスクールをそのまま模倣したのではない。彼はある程度はデンマークのフォークスクールと同様の教育方法を用いてはいるが，彼は現在（アメリカ南部アパラチアが）必要としていることと，デンマークにおいて必要とされたこととは全く異質のものであることを自覚していた。彼は産業従事者，農民の指導者，共同組合員，宗教グループ，異人種間グループ等の様々なグループの指導者のためのワークショップを開いたのである。”[33]

C　グルントヴィ後のフォルケホイスコーレ運動に対するホートンの評価

ホートンは，デンマーク滞在中，多くのフォルケホイスコーレを訪れ，実際にそこの学生になったり，教師に

直接話を聞いたりして，グルントヴィ後150年余り各地で連綿と続いているフォルケホイスコーレについて理解しようと努めた。しかし，彼はデンマークで実際に目にした全てのフォルケホイスコーレに共鳴したわけではない。彼の目にはあるものは制度化されすぎているように思われた。またあるものは，教師の役割がホートンの思想とは一致しないものもあった。彼は自らがフォルケホイスコーレで学んだ経験をもとに次のように述べている。

"私は，ある学校は無批判に時代に適応しているのではないかと思った。ある教師などは非常に親切で色々面倒を見てくれたが，私が教師だったらそのようなことはしないだろう。" [34]

もちろん，中にはホートンが感銘を受けたフォルケホイスコーレもあった。例えば，エルシノアのインターナショナル・ピープルズ・カレッジやエスベルグの労働者フォルケホイスコーレは，その精神も形態も創設当初の理念を受け継いでいた。特に労働者フォルケホイスコーレは，農民のための学校であった当初の姿とは異なるにもかかわらず，労働者を力づけ彼らの抱える問題を解決することの出来る素晴らしい学校であった。ホートンは帰国後，エスベルグの労働者フォルケホイスコーレのディレクターであるポール・ハンセン（Poul Hansen）に次のような手紙を送り，彼の感動を伝えている。

"フォーク・ハイスクールの理念を労働者学校の要求に適応させている貴校の姿を見て，私は他の国においても同様のことが可能なのではないかと思うようになりました。古いタイプのフォークスクールの理想形を維持することが可能なのだということを知って，勉強になりました。学校の形態を変えても，貴校では個人的な交流も精神的な暖かさも失うこともなく，またフォーク・ハイスクールの目的や使命といった理念を捨てることもなく，今日まで続いているのですから。" [35]

終わりに
——グルントヴィの思想の現代的意義とホートンの成人教育理念——

グルントヴィのフォルケホイスコーレの理念は，ヨーロッパのあちこちで社会変革や革命が起こり，デンマークにおいても絶対王政から民主主義へとの変革の大きなうねりがあった19世紀前半という，歴史的背景を抜きには語れない。しかし彼が行った"死の学校"批判は，150年以上たった今日でも，驚くほど現代的な問題である。

彼は"死の学校"に対抗するものとして，フォルケホイスコーレの構想を打ち出したが，それは既存の教育形態ではアメリカ南部アパラチアの民衆のための教育には応えることが出来ないといった問題意識をもっていたホートンをとらえるに十分なものであった。しかし，ホートンはデンマークのフォルケホイスコーレをアパラチアに移植しようとは思わなかった。

その理由は，ホートンがフレイレに語った次の言葉に表れている。

"デンマークのフォークスクールを取り出して，東テネシーの山地に投げ出すことは，デンマークの海岸にある木をアメリカの土地に持ってきて植えて大きくさせることと同じ位不可能なことです。……その考え方が本当にぴったりとあうのかということを常に考えなければなりません。" [36]

ホートンのこの思想こそ，アメリカに移植されたデンマーク式のフォークスクールが消滅していった中で，ハイランダーが今日もなお民衆の自己啓発の場，社会変革の場となって生きながらえている理由であろう。[37] 換言すれば，グルントヴィの精神は形を変えてアパラチアの山中ハイランダーに息づいているといえよう。

グルントヴィの試験，資格を廃した対抗教育の思想は，資格社会である今日のアメリカ社会や職業と教育との関係が益々密接になっている現代の先進諸国にはなじまないものかもしれない。しかし，それは資本主義経済を超えた共生の思想の観点から見ると，未来に向けて大きな可能性があることに気が付く。また，グルントヴィの"死の学校"批判，書物による教育の批判，対話の重視は，知識注入型教育の批判をし，対話による教育を重視しているパウロ・フレイレ（Paulo Freire）の思想と驚くほど共通性がある。筆者にとって今後の課題は，グルントヴィ，ホートン，フレイレの思想の共通点を探求することにより，先進国主導ではない民衆教育の可能性を探ることに他ならない。

〈注・引用文献〉

1）Myles Horton, "Grundtvig's Influences on Highlander Research and Education Center," *An Approach to Education Presented Through a Collection of Writings*, ed. Highlander Research and Education Center (Tennessee: Highlander Research and Education Center, 1989) 89.
また，グルントヴィが27歳の時に経験した失望観については、本稿第Ⅱ章A節で触れる。

2）佐々木正治「第三章デンマーク教育史」梅根悟監修，世界教育史研究会編『世界教育史大系14北欧教育史』

326頁。なお，フォルケホイスコーレ(Folkehojskole)は日本では，"国民高等学校"あるいは"国民大学"と訳されてきた。また英語訳も，"People's College", "Folk High School", "Common People's High School"など様々である。

フォルケホイスコーレを"国民高等学校"とすると戦後日本の教育制度とはあわない，また"国民大学"とすると通常のアカデミックな大学とは異なるフォルケホイスコーレの性質を表現しない，等の清水満の指摘（オヴェ・コースゴール，清水満編『デンマークに生れたフリースクール『フォルケホイスコーレ』の世界—グルントヴィと民衆の大学—』新評論，1993年，38-40頁）にならって，本稿ではFolkehojskoleをフォルケホイスコーレとデンマーク語読みのままで用いることとする。

3）ハイランダー・フォークスクールは1932年，Myles Horton，Don Westらによってテネシー州アパラチア地方に設立された民衆学校である。ハイランダーについては，拙稿「Highlander Folk Schoolにおける成人教育の展開—Citizenship School Programを中心に—」東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画講座社会教育学研究室『生涯学習・社会教育学研究』第20号，1996年他を参照されたい。

4）欧米における研究は多数あるが英文のものでは，Holger Begtrup et al.，*The Folk High Schools of Denmark and the Development of a Faming Community* (London: Oxford University Press Geoffrey Cumberlege, 1949); Alvah Treat Canfield, *Folk High Schools of Denmark and Sweden: Their Develipment and Their Present Status* (Michigan: University Microfilms International, 1985)等がある。

5）日本における受容に関しては，オヴェ・コースゴール，清水満編，前掲書，180-190頁を参照。

6）佐々木正治「デンマーク国民大学制度成立の経緯」日本教育学会『教育学研究』第32巻，第1号，1965年，佐々木正治「19世紀デンマーク社会教育（folkeoplysning）の発展(Ⅱ)—ナショナリズムとホイスコーレ—」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第19巻，1973年，佐々木正治「デンマーク社会教育制度の発展—権利の認識と公的保障—」藤田秀雄編『学習権保障の国際的動向』東洋館，1975年他を参照。

7）以下，ホートンの人生の歩みとその思想形成については，Frank Adams, *Uneaething Seeds of Fire: The Idea of Highlander* (North Carolina: John F. Blair, 1975)によった。

8）John M. Glen, *Highlander: No Ordinary School* 1932-1962 (Lexinton: the Universit Press of Kentucky, 1988) 8.

9）Frank Adams, op. cit., 24.

10）オヴェ・コースゴール，清水満編，前掲書，Ⅰ頁。

11）同上書，86頁。

12）同上書，Ⅰ頁。

13）同上書，12頁。

14）同上書，90頁，及びAlbert C. Tuijinman ed., *International Encylopedia of Aducation and Training Second Edition* (Oxford, UK: Pergamon, 1996) 138.

15）オヴェ・コースゴール，清水満編，前掲書，92-95頁。

16）佐々木正治，「デンマーク国民大学制度成立の経緯」日本教育学会『教育学研究』第32巻，第1号，1965年，11頁。

17）Holger Begtrup et al. *op.cit.*, 22

18）19世紀前半のデンマークの政治・外交に関しては，Holger Begtrup et al. *op.cit.*，佐々木正治，「デンマーク国民大学制度成立の経緯」日本教育学会『教育学研究』第32巻，第1号，1965年，オヴェ・コースゴール，清水満編，前掲書によった。

19）Albert C. Tuijinman ed., *op.cit.*, 135-139.

20）清水満はグルントヴィの思想を称して，"革命的ロマン主義"と名づけている。(オヴェ・コースゴール，清水満編，前掲書，112-114頁参照。)

21）佐々木正治，前掲論文，1965年，12頁。

22）梅根悟監修，世界教育史研究会編，前掲書，328頁。

23）オヴェ・コースゴール，清水満編，前掲書，234頁。

24）佐々木正治，前掲論文，1965年，16頁。

25）オヴェ・コースゴール，清水満編，前掲書，102-103頁。

26）佐々木正治，前掲論文，1965年，16頁。

27）同上論文，17頁。

28）oplysningについては，オヴェ・コースゴール，清水満編，前掲書，236-239頁を参照されたい。

29）Myles Horton, *op.cit.*, 89.

30）*Ibid.*, 90.

31）*Ibid.*, 90.

32）*Ibid.*, 91.

33）*Ibid.*, 92.

34）*Ibid.*, 91.

35）*Ibid.*, 91.

36）Myles Horton & Paulo Freire, *We Make the Road by Walking: Conversations on Education and Social Change* (Philadelphia: Temple University Press, 1990) 154.

37) Canfieldは20世紀初頭に導入された数十のデンマーク型フォークスクールがどれも長くは続かなかったとし，その理由として資格社会アメリカでは無試験・無資格のフォークスクールはそぐわないとしている。(Alvah Treat Canfield, *op.cit.*, 141.)